

中田 実・松原貴子（著）

ペインリハビリテーション入門

友 利 幸之介

（東京工科大学，作業療法士）



最近書籍編集のお仕事をいただく機会が増えたが、その立場からみても、本書は非の打ち所がないほど完璧な仕上りの印象を受けた。一度手にとっていただければすぐわかると思うが、個人的に良書といわれる本に必須な条件である、①要点が絞られている、②内容がわかりやすい、③現場で使いやすい、のすべてを兼ね備えている。

まず要点については、「痛み」の定義に始まり、メカニズム、評価と介入、付録の評価票等が、わずか160ページに収まっている。手にとった感じは通販ではわからないだろうが、非常にコンパクトである。良書というのは「何を載せるのか」ということと同様、「何を載せないか」にこだわっている。詰め込みすぎないのだ。本書もあきらめずに読めるちょうどよい厚さの分量となっており、難なく読み進めることができた。これは項目の構成、順番に依るところも大きい。「痛み」の明確な定義、生理学、メカニズムといったしっかりとした基礎を学んだうえに、臨床場面の評価や介入がある。基礎か臨床のいずれかに偏った本はよく見かけるが、本書はその両方のバ

ランスがとても心地よい。基礎と臨床を行き来しながら、ペインリハビリテーションの理解を深化させることができるだろう。

次にわかりやすい本には2種類ある。単に内容のレベルを低くしただけの本と、レベルは高度に維持されたまま工夫を凝らしてわかりやすく加工された本である。近年、前者の本が増えているが、もちろん本書は後者である。まず図が見開き1ページに1～2つ、ふんだんに活用されている。動物を用いた基礎研究の結果や神経生理等、一見難解な項目も並んでいるが、図と一緒にあればちゃんと理解できるようになっている。また難しそうな単語には用語解説が巻末に用意されている。とにかく読み手が途中でつまづかないような細やかな気配りが感じられる。また本書のデザインも秀逸で、フォントや字間、色使いも親しみやすい雰囲気を出しており、何とか理解してみようという気になるから不思議である。おそらく著者らは、細部まで妥協を許さなかったと思われる。

最後に、良書というのは読み手のモチベーションを高め、実際の行動変容を引き起こしてくれる。

私の場合は学生への講義であるが、たとえば本書の図表をスライドに起こし、テキストを解説すればそのまま授業で使えるような印象である。内容も学部学生でもついていけるだろう。また臨床家においても、付録の評価票はそのままコピーして即実践で使えるほど体裁も整っており、また評価の内容も丁寧に記載されているため、不可解な「痛み」の訴えも本書があればある程度整理できるのではないだろうか。とにかく本書は、単にペインリハビリテーションの知見をまとめただけでなく、臨床や教育現場での使用、読み手の行動変容までもかなり意識した本であることは間違いない。

ペインリハビリテーションはチームで動くことが多いと思うが、本書は、療法士だけでなく、医師、看護師、薬剤師、あるいは行政機関等、ペインリハビリテーションにかかわる多領域において共通のバイブルになるのではないかと期待している。初学者だけでなく、中堅以降の方にもおすすめの一冊である。

〔 B5判 168頁 3,500円+税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357 〕